

〈書評論文〉

当事者として「ひきこもり」と「社会／個人」を問う視点 —「実存的問題」と「社会的問題」のあいだで—

石川良子『ひきこもりの〈ゴール〉—「就労」でもなく「対人関係」でもなく』
(青弓社、2007年)

伊藤 康貴

1. 問題意識

「ひきこもり」は、1990年前後において、不登校の文脈から分化するかたちで、「(学齢期を過ぎた後にも)対人関係に不安がある」という観点から社会的問題の語彙として一般化し、2000年前後の「ひきこもり」と目された人による「重大犯罪」事件とその事件報道を経て、「犯罪リスク」という観点から重要な社会的問題としてクローズアップされた経緯を持っている。そして、2004年の「ニート(NEET)」という語彙の(日本社会の文脈に適合的に変形した上での)輸入以降、「ひきこもり」は「ニート」という語彙に包括され、「ニート」において中核的な問題とされた「就労」に関することが、「ひきこもり」においても問われるようになった。社会的な問題としてクローズアップされて以降、「ひきこもり」は主に厚生労働省による支援対象となり、公的な相談・支援体制が全国的に整備されていくことになった。

2010年7月、内閣府は「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)」¹を公表した。「『ひきこもり』に該当する子ども・若者がどの程度存在し、どのような支援を必要としているのかを把握することで、地域支援ネットワークの形成を促進するための基礎資料とする」ことを目的としたこの統計調査において、「ひきこもり群」とされた人々は有効回収数の1.79%であり、全国においては約69.6万人の「ひきこもり群」とされる人々が存在すると推計された。またこの調査においては、実際には「ひきこもり」ではないが、ひきこもっている人々の気持ちがわかるとか、自分でもひきこもりたいと思ったことがあると回答した人々を「ひきこもり親和群」と設定したが、そのような人々は有効回収数の3.99%であり、全国で約155万人が存在すると推計された²。

1 内閣府、2010、「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)」(http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html)。

2 本稿は石川の著作を批評することが目的であるため、この統計調査に内在する議論については、立ち入らない。

確かに、「ひきこもり」であることが社会的な問題とされ、かつ「ひきこもり」に対する支援が必要とされるとき、支援の対象となる当の「ひきこもり」を（潜在的なものも含め）数（人口）として把握し、名付けられた社会的カテゴリ（群）として特定していくための調査は必要な営みであろう。特に、今回内閣府が実施した全国の人々を対象にした統計調査は、「ひきこもり」に関する実態を統計学的手法にのっとり網羅的に把握することを試みている点において実証的であり、この調査において提示された数値は、「ひきこもり」を政策課題として設定するための説得的な材料となり、また支援のデザインを構築する上での重要な基礎資料となろう。「ひきこもり」の統計的な把握は、「政策」や「支援」という文脈においては、確かな意義を持っていると考えられるのである。

しかしながら、ひとくちに「ひきこもり」という言葉で括ってしまっても、そのあり方は多様である。先述した内閣府による調査においても、「ひきこもり群」とされた約69.6万人のうち、「自室からほとんど出ない」あるいは「自室からは出るが、家からは出ない」、「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かけられる」といった「狭義のひきこもり」とされる人々は約23.6万人と推計される一方で、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」という「準ひきこもり」とされる人々は約46万人と推計されている。「ひきこもり群」とされる人々のうち、66.1%の人々は、ふだんは家にいながらも、自分の趣味に関する用事ときには外出可能であり、「ひきこもり」として一般にイメージされているであろう「家から出ない」という人々（「自室からほとんど出ない」、「自室からは出るが、家からは出ない」）は、「ひきこもり群」のなかでも11.9%に留まっている。また、「ひきこもり群」のうちで「無職」と答えた人々は67.8%である一方で、「学生」と答えた人々は16.9%、「正社員」もしくは「契約社員」、「派遣社員」、「パート・アルバイト」として「勤めている」と答えた人々はあわせて13.6%、また「家事手伝いをしている」と答えた人々は1.7%である。「無職」と答えた人々のなかでも、75%の人々は「いままでに働いた経験がある」と答えており、かつ40%の人々は「現在就職活動をしている」と答えている。このように質問紙における調査においても「ひきこもり」とされる人々の実態は多様であることが垣間見られる。つまりは「ひきこもり」といっても、その当事者のあり方は、一枚岩の定義に収まり切るものではないと考えられるのである。

だが、こうした「ひきこもり」の多様さを垣間見せてくれる質問紙調査も、個々の当事者のあり様を深く描くには限界がある。特に標準化された質問項目を選択させるだけの調査の場合においては、調査する側が想定もしていなかったであろう多様な当事者の個人史的側面、およびかれらの生活の質的側面を描くことは難しい。やはり、このような当事者らに向き合いつつ、質問紙による大量調査だけでは見えてこない個々の「ひきこもり」の内実を理解しようと努めるときには、かつて中野卓も言及したようにライフ・ヒストリー調査による当事者へのアプローチが要請されるのではないだろうか。

中野は「特定個人のモノグラフ的研究を通して一もとり多様な個々人の事例を積み重ねながら—そうした人間個人から全体社会へ接近する試み」の重要性を説き、「大量調査では捉えられないものを捉えたいという考え」から、「社会的存在である人間個人というものについて、ライフ・ヒストリーを聴くことによって、いったいどこまで知ることができるかという理論的で実証的な関心に基づく（中略）探索的な研究」を志向する（中野 [1981] 2003）。今回とり上げる石川の著作もまた、そのような志向性を持ったものとして捉えることが可能であろう。本書の著者である石川は、「問題は若者の意識ではなく社会構造にこそあるという認識、そのために現行の制度を改善していくべきだと

いう主張は非常に重要である。だが、他方で社会構造が個人の意識を深く規定していることを考えれば、たっただいま個々の若者が何を思い、どのような困難を抱え、そのただなかを生きているのかということも把握しなければならない。若者が求めているものを明らかにし、そのうえで望ましい社会とは一体いかなるものか構想していく必要があるだろう」(p.9)と述べ、当事者の語りから、人々が日常を生きている全体社会や社会構造へとアプローチしようと試みているからである。

2. 本書の目的と意義

本書においては、著者が「ひきこもり」の「コミュニティで多くの人と出会い、その人たちが語ってくれた個別的な経験を、できるだけ本人たちの実感から離れることがないよう」に、著者なりに「再構成した一つの“ストーリー”あるいは“パースペクティブ(見方)”」が描かれている。すなわち本書では、「ひきこもったことがない私にとって理解可能な形で当事者の経験を再構成」することによって「ひきこもり」当事者に対する著者の視点を提示し、「ひきこもり」への理解可能性を高めようと企図している(p.14、p.39)。

著者は、「ひきこもり」の自助グループへの参与観察や、そこに参加している「ひきこもり」当事者との聞き取り調査(ライフストーリー・インタビュー)をもとに、「ひきこもり」当事者のもつ経験を、著者によるストーリーの再構成を経つつ描き出すことを通じて、「ひきこもり」に対する理解をうながす視点を提示している。「ひきこもり」という社会現象の実態を明らかにすることではなく、あくまで「ひきこもり」への理解のための視点を提示することが本書の目的である(p.10、p.13-4)。「ひきこもり」当事者の経験を読み解くことを通じて、「ひきこもり」とは何か、あるいは「ひきこもり」からの〈回復〉とは何かを問い直そうというわけである(p.16)。

ちなみに、本書でいう「当事者」とは、自らを「ひきこもり」の当事者として定義(自己規定)している人々とされる(p.15)。そして、本書に登場するインフォーマント(情報提供者)は、著者が参与観察を行っていた自助グループに、「ひきこもり」の経験を持つことを通じて関わってきた人々である。つまりは、本書における「当事者」とは、自らの経験を語る(ことができる)ということによって「ひきこもり」の「当事者」となった人々とも言い換えられる³。当事者をこのように扱うことに関する評者なりの疑義については本稿第5章において触れるが、少なくともインフォーマントたる彼／彼女らは、自らの「ひきこもり」経験を積極的に語ろうとする姿勢において共通した特徴を持っている。本書はそのような彼／彼女らの語りを素材にしているのである(p.17)。

なお、著者が持つに至った「ひきこもり」への視点は、長期にわたる参与観察において、「当事者」とのやりとりのなかで形成されたものである。議論を先取りすると、著者は、ライフストーリー・インタビューをもとにした「当事者」の経験の語りを読み解くことを通じて、「ひきこもり」が「実存的問題」をまとったものであることを強調しているが、その根底には、「ひきこもり」という経験を、「自己や労働や生」といった、人生における「諸々の〈意味〉を問う営み」として、ある種積極的な意義を見出していこうとする著者の姿勢がある。この姿勢は、本書が主たる読者対象を、「ひきこもり」の当事者を含めた「ひきこもり」に関わっている人々に設定し、さらには既存の「ひきこも

3 以下本稿においては、自らを「ひきこもり」と語るようになった当事者、要するに著者のインフォーマントとなった当事者を、自らの状態を語りえない当事者と区別するために、「当事者」とかぎ括弧で括る。

り」への専門家言説に対する再考を促すことをも企図していることにも関わる。

もちろんこのような姿勢をとることによって、著者自身も述べているように本書は、「ひきこもり」の当事者や、「ひきこもり」に直接関わっている人々に対してエンパワーメント的な影響をおよぼすであろう。著者の考えに寄り添うならば、「ひきこもり」の当事者（や関係者）たちは、本書の主張を自身の内に再帰的に取り込むことによって、自らの内に抱えている自身への否定的感情を再構成し、さらには軽減するだろうと考えられる。つまり本書は、「ひきこもり」における新たな視点を、本書第5章で展開されたような「ひきこもり」当事者の「内省的プロセス」における自己像や人生像の再構成に使われるひとつの言説として提示しようという試みなのである。「ひきこもり」への理解を促すための視点を提示することの眼目は、まさしくここにあると思われる。

ただし、次のことには留意しておく必要がある。つまり、本書が個々の当事者に対してどのように再帰的に取り込まれるかは、確かに当事者自身の判断に任されてはいるが、その判断がどのようになされるかは、当事者自身の価値観や周辺の現状、あるいは当事者を取り巻く社会的状況に大きく影響されるであろう。たとえば、関水徹平は、アーヴィング・ゴフマンの相互行為論の視点から、「ひきこもり」当事者が抱える「社会参加」に向けた困難さの背景を理解しようと試みているが、彼によると、「ひきこもり」支援を考える際には、「社会参加できる／できない」という二分法ではなく、「どのような自己としてどのような状況に『参加』してゆくのか」という「状況の定義と自我の関係を問う視点」が重要であることを指摘する（関水 2010）。専門家言説に対抗したかたちで「ひきこもり」の〈回復目標〉を相対化し、「どこかに〈回復〉と呼べる地点がある」という認識枠組みそのものを解体する必要がある」（p.237）と指摘する本書は、「ひきこもり」の当事者を取り巻く状況に対して、一石を投じているといえるため、まさしく意義があると考えられる。

3. 本書の概要

第1章においては、著者のフィールドでの経験をもとにした問題意識が提示される。まず、本書の目的や、調査の方法、調査対象たる「ひきこもり」の「当事者」の説明がなされ、続いて2001年から2006年にかけての著者のフィールドでの経験が記述される。評者が最初に記述したような、「就労支援」へと向かう「ひきこもり」支援をめぐる情勢のもとで「ひきこもり」の自助グループなどの状況が如何なるものであったかが概観された後、著者は、「ひきこもり」支援における〈回復目標〉として「就労」を設定する〈社会参加〉路線に疑問を呈する。（「ひきこもり」の経験が無い）著者は、はたから見れば対人関係も充実し、精神的にも安定しているような人びとが自助グループに溜まっていく様子を観察しながら、「ひきこもり」のコミュニティから一步踏み出そうとしない「当事者」に、参与観察当初はもどかしさを感じていたが、そもそもそのような「ひきこもり」の「当事者」への「否定的感情」こそが、葛藤のただなかで自己批判を繰り返す当事者の自己否定感を増幅し、当事者を〈社会参加〉から遠ざけるのではないかと考えるに至る。そして、「ひきこもり」経験を持つ上山和樹を引用（上山 2001）しながら、「どうすれば納得いく形で生きていけるのかを考え抜く作業を伴わない就労支援は、当事者にとって有意義なものにはなりえない」（p.29）と著者は主張し、「内省的プロセス」の重要性を説く。よって、「ひきこもり」とは何で、その何が問題で、どうなれば〈回復〉したといえるのかを問う必要性があると著者は考えるのである。

第2章では、「ひきこもり」がどのような社会的文脈で問題化されてきたのかを、新聞記事と関連

書籍を参照しながら概観している。まず「ひきこもり」に関する新聞記事数と関連書籍の刊行数の推移から、「ひきこもり」は①1980年代末に社会問題のひとつとして認識されはじめ、②1990年代を通じて緩やかに関心を集めつつ、③2000年代に入ってから急速に社会的認知が進み、④2004年以降は過熱化した報道が収束の方向に向かうという大まかな図が描けると指摘し、この4つの期間における「ひきこもり」の社会的文脈を細かく分析しながら、「ひきこもり」の社会問題化の過程を整理している。要するに、1980年代においては「若者の無気力化」が問題視されていたが、1990年代に入って不登校支援から取り残された領域として「ひきこもり」が問題化されるとともに、第三者による介入の必要性が、主に支援者や精神科医によって議論され、1990年代後半に差し掛かると、「朝日新聞」で特集が組まれたり、テレビ番組で採り上げられたり、あるいは「ひきこもり」に関する議論が精神医学・心理学分野で活発化したりするようになる。2000年代に入ると、1999年末から立て続けに起こった3つの事件報道を通じて、「ひきこもり」と犯罪とが結び付けられるという「モラル・パニック」状況になり、「ひきこもり」という言葉が広く社会的に認知され関心を集めるようになるとともに、当事者や家族、民間団体でのグループ活動が活発化し、厚生労働省による公的な支援体制も全国的に整備されるようになる。そして、当事者が利用しやすい就労支援の場が次第に整備されるにつれて、「ひきこもり」の〈回復目標〉として就労が意識されるようになり、2004年の「ニート」という言葉の登場以降、就労の重視は決定的なものとなったというのが、「ひきこもり」をめぐる社会的文脈の変遷である。ここで著者は、「ひきこもり」における〈回復〉の基準が、内面的なところから外面的なところへと変化していることを指摘する。「葛藤の緩和・解消」や「充実感の獲得」といったものから「対人関係の獲得」や「就労の達成」といったものへと変化しているというわけである。

続く第3章以降は、「当事者」自身の経験の語り、あるいは著者と「当事者」とのやりとりから「ひきこもり」を読み解く作業に入ってゆく。まず第3章において著者は、ゴフマンの「パッシング」の議論を手がかりに、ひきこもることが「自己防衛のための戦略」であると述べる。当事者は、「信頼を失う事情」を含めて互によく知り合っている親密な他者（その代表が家族）となら関わることができる一方で、それ以外の「ひきこもり」への否定的反応が予見される他者とは関われない状況があるが、それは「生活誌的な匿名性の程度」、すなわち「ひきこもり」であることが他者に知られる（可能性が高い）こと、あるいは（「ひきこもり」という）スティグマを強く意識させられるような「精神的苦痛を助長されるやりとり」によって規定されていると著者は指摘する。しかし、スティグマの顕在化をパッシングによって回避するという自己防衛戦略は、長期的に見れば当事者を〈社会参加〉から遠のかせてしまう。よって著者は、社会に存在する「ひきこもり」への否定的まなざしによって、当事者は余計に「ひきこもらされているのではないか」と考え、「ひきこもり」を否認する社会のあり方を批判するのである。

第4章においては、対人関係を獲得した後も「きつさ」が残るという「当事者」の語りをもとに、当事者が「ひきこもり」のコミュニティに参加することの意味は二つあると著者は主張する。ひとつには、さまざまな感情や経験を相互に共有できる他者となることができるといって「共感的理解が可能な社会関係の獲得」であり、ふたつには、「ひきこもり」という語彙を自己定義の言葉として使えるようになるという「自己を語るための語彙⁴の獲得」である。特に著者はふたつめの意味を強調するが、それは、「ひきこもり」状態というものは自分が何者であるかを定義できず、他者に向

4 「自己を語るための語彙」に関する議論は片桐雅隆（2000）を参照のこと。

けても自分が何者なのか語れないものであるがために不安定な状態におかれているが、「ひきこもり」という語彙を自己定義の言葉として引き受けることによって、当事者は自らを位置づける「肩書」を獲得し、さらには「ひきこもり」という名づけによって（ピーター・バーガーが言うように）「具体的で、主観的に特異な私」の経験が「当のカテゴリーに該当する私たち」の経験となり、他の当事者とつながる可能性に開かれるようになるからである。また著者は、コミュニティに参加することは、（家族以外との）対人関係を獲得していく過程であるがために、「ひきこもり」を「対人関係の欠如」として捉える大方の専門家言説にしたがう限り、その過程は「ひきこもり」を「自己を語るための語彙」として使えなくなっていく過程でもあると指摘する。コミュニティに参加するようになった当事者は、再び「自己を語るための語彙」を喪失する危険にさらされてしまうのである。

そして第5章においては、前章における「自己を語るための語彙」の視点から、「ひきこもり」を認知した当事者が、現在において過去と未来をどのように（再）構成しているのかが描き出される。著者は、桜井厚が言うような「危機」と「転機」（桜井2002）、あるいはアーサー・フランクが言うような「病いの経験」における「自己喪失」と「自己変容」という概念（Frank 1995=2002）を引用しながら、そのような内容が盛り込まれた「当事者」のライフストーリーを読み解くことを通じて、「ひきこもり」を〈社会参加〉していない状態ではなく、「ひきこもる以前に思い描いていた自己像や人生像が崩壊したところから社会に流通するような諸言説を取り入れながら、それらを再構築していく長期的な“過程”」（p.151）として捉えるべきだと主張する。また、フランクの「探求の物語」を引きながら、ひきこもることは、それ以前に創造されたものとは異なる人生のスタートであり、「対人関係の獲得」や「就労の達成」はいずれも〈回復〉にはなりえないとも指摘する。

この、「対人関係の獲得」や「就労の達成」はいずれも〈回復目標〉にはなりえないという立ち位置から、第6章において著者は、就労を重視する「ニート」と「ひきこもり」とをひと括りに議論すべきではないと述べる。「ニート」の主要論者である玄田有史の「とりあえず働いてみる」という処方箋は、「ひきこもり」においても一見有効そうに見えても、自分のことや生きること、働くことへの自分なりの確かな意味を問うことを回避するという点において不十分であるというわけである。「当事者」とのやりとりのなかで形成された著者がイメージする「ひきこもり」の〈回復〉とは、このような意味を問いながら、社会との接点を模索しつつ、自分なりの納得した答えを得るという試行錯誤の過程である。「対人関係の獲得」や「就労の達成」といった外面的なものだけではなく、むしろ内面的なプロセスをも〈回復〉として認識すべきと著者は主張するのである。

そして第7章では、前章で触れられた自分のことや生きること、働くことへの自分なりの確かな〈意味〉の最も基底的なものが描写される。端的に言えば、それは生きようとする〈意思〉であり、「当事者」の語りからは、生きる／生き（られ）ないという水準の葛藤を経て、生きることの意味を位置付けようとしていることが伺える。そして現状の日本社会において、一旦ひきこもることによってもたらされる困難を生き抜いていくためには、こういった形であれ生き続けている自分を想像できることが重要であると著者は述べ、またそのような「『未来の』感覚」を認識することは、若者の自立全般を問う上でも重要だと指摘する。

最後の第8章では、これまでの議論を踏まえた上で、「ひきこもり」当事者は、ギデنزが言うような「実存的問題」に直面しつつもそれに答えを与えられないという存在論的不安に直面していると指摘する。日常では強く意識しないような事柄を、ひきこもることによる「ルーティーンの破綻」によって強く意識せざるを得ないというわけである。しかし著者は、そのような「実存的問題」に向き

合い、実存的な〈疑問〉に折り合いをつけていこうとすること自体が重要であると述べ、〈対人関係〉や〈社会参加〉への第一歩のためには、このような必然的に発生する内面的なプロセスも大切だと主張し、存在論的不安／安心の観点から「ひきこもり」を理解すべきと強調する。また後期近代における再帰性の高まりを受けて、そもそも社会における人々はみな「実存的問題」にさらされており、その点においてひきこもっている人々といない人々は同じ地平に立っているゆえに、ひきこもっていない人々にとっての「ひきこもり」は、自身に実存的な〈疑問〉を喚起させる〈実存的問題〉であるがために、強い否定的感情や批判が呼び起こされるということを、著者はヤングの「他者の悪魔化」とギデンズの「経験の隔離」という概念を援用しながら論じ、「ひきこもり」を彼らだけの問題だけとしてではなく私たちの問題としても捉える必要があり、そのためには「ひきこもり」当事者への理解を深めようと努めることが必要だと締め括る。

4. 考察

4-1. 社会的問題として「ひきこもり」を問う視点

著者は「ひきこもり」を「実存的問題」と主張する。つまり「ひきこもり」は、実存的な〈疑問〉にともなうさまざまな意味を問いながら、社会との接点を模索しつつ、自分なりの納得した答えを得るという試行錯誤の過程であり、生きていくことへの〈意思〉を確認する内面的プロセスであるということである。ここからは、「ひきこもり」当事者の経験に、ある種の積極的な意義を認めようとする著者の姿勢が伺えるが、著者が示す当事者像は、あくまで自助グループという場に参与して、「自己を語るための語彙」として「ひきこもり」という言葉を引き受けた人々である。またそこへ至るまでの過程は、本書における「当事者」の語りでも示されているように、「混乱」したものであった。よって、自助グループなどの支援機関に参与していない／できない、長い年月を混乱した状況のなかで生活している「ひきこもり」の人々、あるいはそのような人々を掬い取ろうとする支援者・専門家の立場からすれば、著者の主張は生ぬるく感じられるであろう。石川の提示する「ひきこもり」を「実存的問題」と捉える認識枠組みは、自らの経験を語りえない（語りたくない）当事者が置き去りにされやすいような認識枠組みであると同時に、当事者やその家族が内在する経済的・時間的に多大な負担を、等閑視しているとみなされやすいからである。

井出草平は、実証的な調査によりながら、いま現在「ひきこもり」の渦中にある人々のニーズを捉えて、支援サービスの制度的構築を急ぐべきだと訴えるが（井出 2009）、そこには、「ひきこもり」の現状（例えば、当事者や親の高齢化、ひきこもっている期間の長期化など）を社会的に解決すべき「問題」と捉える視点が存在する（井出 2007）。このように、社会政策的に解決すべき「社会的問題」として「ひきこもり」を捉えることも必要なことではあるだろう。「ひきこもり」には「社会サービスが不在」としているという議論（樋口 2008）を鑑みれば、何らかの課題を抱えた当事者が、自身の課題の解決のために自助グループなどの支援施設の社会的資源にアクセスする際に、そのような支援環境が整備されているという状況が作り出されているということは、同時に当事者が個々の課題を解決しやすい状況が作り出されているということでもある。「ひきこもり」を政策的課題に載せ、解決すべき「社会的問題」として取り扱う意義はここにあると思われる。先述した統計調査は、まさにこの文脈においてなされたものであり、そこには「ひきこもり」という「社会的問題」を早急に解決すべきという姿勢が伺えるのである。

4-2. 「実存的問題」と「社会的問題」のあいだ

それでは、本書における「実存的問題」と、前節で述べたような「社会的問題」とは相対立するものなのであろうか。前者は、「ひきこもり」当事者の営みが、その人の人生を問い直す営みであるという点において意義があるという見方であり、後者は「ひきこもり」当事者が直面している状況は、単に自殺を引き起こすまでに至っていない状況であって、少しでも「ひきこもり」の期間を短くした方がよいという見方であるが、このふたつの見方は、おそらく、なんら相対立するものではないであろう。ただ、この両者が持つ志向性が、それぞれの立脚する立ち位置を含めて、位相がズレているというだけの話である。自らの課題に直面している個々の当事者は、それを早急に何とかしたいと考えている場合においては、さまざまな社会的資源にアクセスしやすい状況を好ましく思うだろうし、そのような社会的資源は、当事者の個々の人生におけるある種の「生きづらさ」を軽減させやすくするであろう。よって、「社会的問題」として「ひきこもり」を扱うことにも、(病理・逸脱というまなざしをもたらすこともあるが)一定の意義はあるのである。

ただし評者としては、「ひきこもり」を「社会的問題」としてだけ見る視点には物足りなさを感じてしまう。「ひきこもり」を「社会的問題」として見ることは、社会における短期的な処方箋を組み立てることには役立つだろうが、社会における社会構造や社会意識の中長期的な変革を構想する際には、本書がそうであったように、当事者を取り巻く社会のありようをも問う必要性があり、著者の強調した、当事者は社会によって「ひきこもらされている」という視点を持つことも重要であると考えている。つまりは「実存的問題」として「ひきこもり」を捉える視点は、「ひきこもり」の個々のケースを理解するための視点であると同時に、「ひきこもり」という「社会的問題」が存在することを社会に問い返すための視点でもあるのである。

しかし、「実存的問題」としてだけ見る視点も、評者としては受け入れがたい。当事者が抱えている「生きづらさ」は、研究者が「ひきこもり」を語るうえでは「実存的問題」として捉えられるとしても、実際にその「生きづらさ」のただなかを生きる当事者にとっては、その「実存的問題」が社会的に認められない限り、自らが内に抱く「生きづらさ」は軽減され得ない。「実存的問題」が、当事者の直面する課題である以上、それは研究者の分析枠組み以前のものであり、当事者が課題に対処するためには、それを営むこと自体が「社会的に」受け入れられている必要がある。また、「生きづらさ」が軽減され得ないままに過ぎ去っていく時間も、取り戻すことはできない。時間が過ぎ去るうちに消え去っていく、一人ひとりの当事者が持つ可能性を無碍にはしないと評者は考える。

したがって、「実存的問題」と「社会的問題」という両方の視点を持ちながら、中長期的な社会変革の構想力を保ちつつも、当事者に対する短期的で実践的なサービスをも供給されるべきであろう。この両方の視点を持つのに肝要なのは、やはり「個人」と「社会」との関係性のありようを問い直すことであろう。貴戸理恵は、不登校や「ひきこもり」、「ニート」とされる若者に対して問われている「社会性」とは一体何であるのかを考察するなかにおいて、「ひきこもり」などを生きる若者の「生きづらさ」は、「個人」と「社会」のあいだにあるディスコミュニケーションによる「関係的なもの」とであると指摘し、このみえにくい「個人」と「社会」のあいだにある「関係的な生きづらさ」に目を向ける必要があると説くが(貴戸 2010)、評者は、そのような若者の持つ「関係的な生きづらさ」を問う視点は、まさに短期的な取り組みと中長期的な構想力をともに持つことによって、「見えやすくなる」ものと考えている。そして、このような「ひきこもり」(を含めた若者)をめぐる問いは、いま現在の喫緊の課題として解決する志向性を持たせつつ、中長期的な社会変革への構想力をも志向させる

という取り組みのなかにおいて、「答えらしきもの」が導かれるのではないだろうか。

よって評者は、「ひきこもり」を考える際には、「実存的問題」と「社会的問題」のあいだに横たわる緊張関係を意識しつつ、両者をともに組み合わせた視点を持つ姿勢こそが必要であると考え。 「ひきこもり」をめぐる問いは、何も「ひきこもり」当事者を問うだけには留まらず、当事者をめぐる「社会」や、その「社会」に生きる無数の「個人」を問う視点をも提供すると思われるからである。そしておそらく、この両者をともに見る視点がなければ、ただいたずらに「問題」を抱える当事者を苦しめる結果となるであろう。おそらく当事者は、自身の抱える「問題」や、それによってもたらされた自らの状態の長期間の持続を望まない一方で、それらが全く無価値であるとみなされることも望んでいないからである。

5. 結語—当事者として「ひきこもり」と「社会／個人」を問う視点

では、「ひきこもり」を「実存的問題」かつ「社会的問題」として総合的に見る視点は、いかにして可能であるのだろうか。評者がここで提起したいのは、「当事者の視点」、つまりは、自らの経験を語る「当事者」の語りから、自らを語りえない当事者への想像力を抱きつつ、当の「問題」、課題を内省的に理解し把握する視点の重要性である。本書で著者が提示した「当事者」は、「ひきこもり」という語彙を自己定義の言葉として取り入れた人々である。つまり本書において著者が提示した「当事者」は、まさに「自己定義によって、自分の問題が何かを見きわめ、自分のニーズをはっきり自覚することによって」（中西・上野 2003：pp.196-7）「当事者」になった人々と言えよう。

しかし、それぞれの語りを読み解くと、「ひきこもり」という語彙を積極的に選び取ったというよりも、それ以外に自己を定義する語彙が無かったがために、受動的に「ひきこもり」という語彙を引き受けざるを得なかったのではないかと評者は考える。要するに、ひとくちに「ひきこもり」の「当事者」といっても、そのあり様は一枚岩ではないということが、本書の記述からでも伺うことができるのである。極論を言えば、「ひきこもり」に関わっていない人々などいもないとも言えるが、そのように当事者を認識することも、当の「問題」を曖昧にしてしまう危険性があるだろう。だが、自らの「問題」を語る人々のみを「当事者」として扱うことも狭隘であるように思う。自らを「ひきこもり」と定義づける「当事者」の語りを読み解くことも重要ではあるが、自らの状態を語れない当事者への想像力も棄ててはならないと評者は考える。

ただし、少なくとも本稿で評者が指摘したいことは、自らを「ひきこもり」と定義した彼／彼女らの語りからは、自らの経験にもとづいた、自らが置かれた現状に対する課題が提起されているように思われるという点である。このような「当事者」は、外部から客観的に測定される客体というよりも、「ニーズ」を持った主体として立ち現れるものであり、自らの経験の語りのなかに自らの「ニーズ」を組み込むことによって、自己のうちに抱える課題を社会に対して表明することができるようになった「当事者」である。「ひきこもり」という文脈においては、「パッシング」という営みを介すこと無く、むしろ自らの経験をさらすことによって、「当事者」になったということになるが、もちろん、このようなそれぞれの「当事者」は、「ひきこもり」の人々全体を代弁できるわけではない。しかしだからといって、それぞれの「当事者」の語りを、個々の特性だけに帰されるものとして扱い、社会的にはほとんど無意味なものであるとみなすこともできない。たとえ全体を代弁できる語りではないにせよ、彼／彼女ら「当事者」の語りは、社会における「常識的なものの見方」に再考を迫る可

能性を持つという点において、価値があるものである。つまりは、個々の「当事者」の「実存的」な課題が、かれらの経験的語りを通じることにより、「社会的」な課題にもなるということである。「実存的問題」のみならず「社会的問題」においても「当事者の視点」に目配りをする重要性がここにある。

本書は、著者のライフストーリー・インタビューによって紡ぎ出された「当事者」の経験の語りによって構成されているが、経験の語りは何もインタビューのような二者以上の人間とのやりとりだけによって生成されるものではない。上山和樹が示したように、自己の「ひきこもり」の経験を自分史として著すことによっても、「当事者」の経験を語ることは可能である。そしておそらく、インタビューのやりとりによって生成された語りと自分史における語りとは、その語りが持つ様相は異なっているものと思われる。相対する調査者に向けられたダイアロギックな語りと、自分で自己を調査するようなモノロギックな自分史では、語られる文脈が違うがために、おのずと語りの内容も異なってくる。相対するインタビュアーはあまり提示されないが、自分史においては豊富に提示されている事柄は、多々あるからである。本稿ではあまり触れる余裕が無いが、例えば、「ひきこもり」の「当事者」による性愛や恋愛に関する語り、つまりは「セクシュアルな語り」は、その際たるものである。インタビュー調査だけでは、「当事者」が語らない（語りえない）がために、「セクシュアル」な事柄は、「ひきこもり」におけるひとつの主題として成立しえないが、「ひきこもり」の自分史においては、「セクシュアルな語り」が豊富に含意されているため、それが可能である。したがって、「ひきこもり」を社会的に考察する際には、自分史における「当事者」の語りを分析することも必要であり、その方法的意義の詳しい検討は、今後の課題として残されているのである⁵。

参考文献

- Frank, Arthur W, 1995, *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, : The University of Chicago Press. (= 2002、鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理』ゆみる出版。)
- 樋口明彦、2008、『「ひきこもり」と社会的排除』荻野ほか編『「ひきこもり」への社会的アプローチ』ミネルヴァ書房：239-65。
- 井出草平、2007、『ひきこもりの社会学』世界思想社。
- 、2009、「書評に答えて」『ソシオロジ』53(3)：159-63。
- 片桐雅隆、2000、『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開』世界思想社。
- 貴戸理恵、2010、「学校に行かない子ども・働かない若者には『社会性』がないのか」佐藤俊樹編『労働—働くことの自由と制度（自由への問い第6巻）』岩波書店：218-38。
- 中西正司・上野千鶴子、2003、『当事者主権』岩波書店。
- 中野卓、1981、「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』32(1)：2-12。(再録：2003、『中野卓著作集—生活史シリーズ1—生活史の研究』東信堂：23-45。)
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 関水徹平、2010、『「ひきこもり」における「参加」の困難—E・ゴフマンの視角から』『ソシオロジ』54(3)：3-17。
- 上山和樹、2001、『「ひきこもり」だった僕から』講談社。

(いとう・こうき 博士課程前期課程)

5 この点に関する試論は、『KG/GP 社会学批評』の別冊である『共同研究 成果論集』に寄稿したので、参照されたい。